

[普及事項]

新技術名： 水稻新品種「秋のきらめき」の目標生育量の策定（平成22～25年）

研究機関名 農業試験場 作物部 作物栽培担当
担当者 佐野広伸・三浦恒子 他3名

[要約] 目標収量を57kg/aとした場合の「秋のきらめき」の収量構成要素は、穂数は350～400本/m²、総籾数は27.0千粒/m²、1穂籾数は70～75粒、登熟歩合は87～93%、千粒重は23.4gである。また、時期別目標茎数は、6月25日は400～450本/m²、最高分けつ期および幼穂形成期は450～500本/m²であり、幼穂形成期の葉緑素計値は39.8、最終葉齢は11.7葉である。

[普及対象範囲]

「秋のきらめき」作付け地帯

[ねらい]

平成24年度に秋田県の奨励品種に採用された「秋のきらめき」は、平成27年度から本格的な作付けが開始される。そこで、「秋のきらめき」の目標収量に対する時期別の目標生育量を策定し、高品質・安定生産のための資料とする。

[技術の内容・特徴]

1. 総籾数や1穂籾数の増加により精玄米重が増加する傾向にあり（図1, 2）、収量57kg/aを確保するための総籾数は27.0千粒、1穂籾数は70～75粒、登熟歩合は87～93%、玄米千粒重は23.4gである（表1）。
2. 収量57kg/aを確保できる1穂籾数70～75粒の場合の穂数は350～400本/m²であり（図3）、このときの幼穂形成期の茎数の目標値は450～500本/m²である（図4）。さらに同様の解析による6月25日の茎数は400～450本/m²である。
3. 収量57kg/aを確保し、穂数および茎数が目標値となる生育からの解析により（図省略）、葉緑素計値の目標値は、6月25日は41.0（39～43）、最高分けつ期・幼穂形成期は39.8（39～42）とする（表2）。葉数の目標値は、最高分けつ期・幼穂形成期は10.0（9～10）葉、最終葉齢は11.7（11～12）葉である（表2）。

[成果の活用上の留意点]

1. 農業試験場内水田ほ場（細粒グライ土）で、栽植密度を21.2株/m²とした中苗移植栽培により調査した。
2. 基肥は窒素成分で0～0.7kg/aを全層施肥とし、追肥は0～0.4kg/aを幼穂形成期、減数分裂期のいずれか、または両時期に行った。
3. 秋のきらめきは早生早であることから、最高分けつ期と幼穂形成期が同時期になる。

[具体的なデータ等]

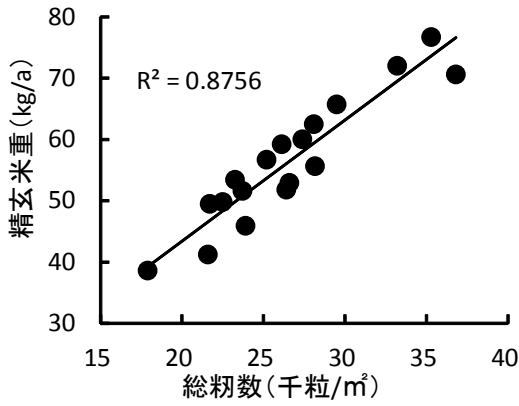


図1 総粒数が精玄米重に及ぼす影響

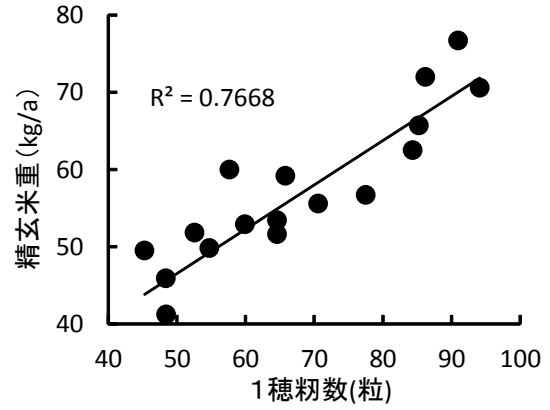


図2 1穂粒数が精玄米重に及ぼす影響

表1 目標収量構成要素

収量 kg/a	穂数 本/m ²	総粒数 千粒/m ²	1穂粒数 粒/本	登熟歩合 %	千粒重 g
57	350~400	27.0	70~75	87~93	23.4

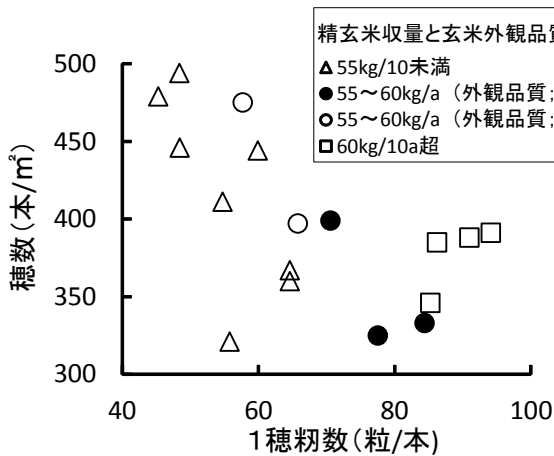


図3 1穂粒数と穂数の関係

注) 玄米外観品質は日本穀物検定協会東北支部による
9段階評価 (1:1等上~9:3等下)

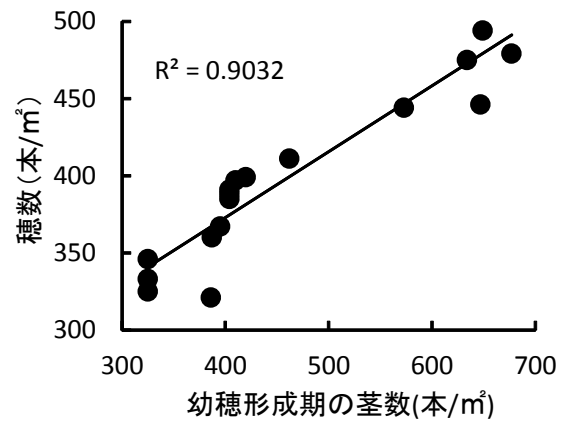


図4 幼穂形成期の茎数が穂数に及ぼす影響

表2 収量57kg/aでの時期別目標生育量

	6月25日	最高分けつ期 幼穂形成期	出穂期
		7月5日	7月27日
茎数(本/m ²)	400~450	450~500	350~400
葉緑素計値 (下限~上限)	41.0 (39~43)	39.8 (39~42)	—
葉数 (下限~上限)	—	10.0 (9~10)	11.7 (11~12)

[発表論文等]

- 1) 三浦恒子・松本眞一・佐野広伸・松波寿典・佐藤雄幸. 2014. 水稻新品種「秋のきらめき」の収量および生育量の目標値の策定. 東北農業研究 67: 5-6